「昔の子どもの夏休み」（抜粋）　倉持喜栄

昭和13年から昭和20年まで　日吉での夏休み生活

『日吉小学校ＰＴＡ文集「くまがわ」第１号』掲載

（略）私の子ども時代とは昭和13年から昭和20年までの８年間と言うことになりますが、もうすでに中国を相手に戦っていた戦争下であり、物不足は始まっていた。

夏休み帳と通知簿を手に家に持って帰っても両親は畑に行って留守であり、待っていたのは一．水を汲んでおくこと、二．風呂を沸かすこと、三．馬の草を刈っておくことなどの伝言であり、これが実行できない時は、相当の叱責を覚悟しなければならず、言われたとおりしない子どもは、まずいなかったと思います。

たとえ実行したとしても、その時の両親の虫の居所具合によっては、掃除がなっていない、ランプのホヤがどうのと文句が出てくるのでなかなか油断ができない。珍しく誉められたりしたら、うれしくてたまらなかった。

５・６年生になると麦刈りなどに出されることもあったが、大方は留守番で、これまた大変。兄弟が２・３人などという家はなくて、少なくても５人、多くて10人という家もあった。

弟妹たちを指図して掃除をする。時間になったら授乳のため畑へ赤ん坊をおぶって連れて行く。すると、帰りには「これとこれもしておくように」と母から追加の注文が出る。子どもながらもよく耐えたものだ。

宿題だってあった。せっかくまとめた作品を小さい弟妹に破られた上、小便をかけられて泣いた思い出だってある。

川遊びもやった。隈川の淀みはけっこう深くて子どもの背が立たないところも何ヶ所かあった。そんなところは子どもの天国だ。川原にズボンもシャツもパンツも全部脱ぎ捨てて準備運動もしないで水に飛び込む。低学年の連中は、浅いところで両手をついてジャブジャブ水をけったり、目をつむったりして頑張っている。川底にはドンコという頭だけ大きい魚がいっぱいいたのを覚えている。

３・４年になると泳げる子どもが出てくる。負けない気を起こして深いところでやってみるが駄目で、生臭い水を腹いっぱい飲んでしまう。そんなことをしているうちに深みから抜けられなくなって溺れることが何回かあり、５・６年生に助けてもらうことがある。

「２・３回溺れなければ泳ぎは覚えられない」というジンクスが子ども仲間にあったが、そんな苦労を繰り返しているうちに〈あーら不思議〉、本当に浮いて沈まないことがある。こんなうれしいことはない。この間、溺れたところへ泳いで行ってみる。何でもない。〈ヤッター〉と思わず心の中で叫ぶ、上級生も祝ってくれる、こんな具合で泳ぎは覚えたが、こんなのは序の口で、常呂川で泳げなくては一人前ではない。川幅が違う、流速が違う、深さだって底が知れない。抜き手を切って常呂川を直角に横切る高等科の生徒に胸を熱くしたものだ。

体が冷えると川原で暖を取り、また水に入るで、夕方まで遊んで家に帰る。急いで仕事を済ませて父母の帰りを待つという日課の繰り返しなのだが、たまには間違いもある。友人に良くないのがいて、〈グスベリを食べて帰ろう〉と言うのである。口の酸っぱくなる話で、今なら断るところだが、あの頃は断り切れない。

そうっと遠回りして、グスベリに近づいてトゲに刺されないように用心しながら青いのを口に入れる。もう少したてば赤くなって味も良くなるのだが待ちきれないのだ。と、どこの家にも意地の悪い老人が留守番をしていて、目や耳が衰えているはずなのにたちまち発見されて怒鳴られ、一目散に逃げてくる。こんな次第で仕事が遅れる。こんな時、機嫌の悪い両親が帰ってきたら大変だった。

蛍狩りもよくやった。夕食後、虫かごを持って、蚊に刺されながら何匹も捕った。夢中になって水路に落ちたこともあったし、野ぐそを踏んでしまったこともあった。

また、おしゃれな独身の先生がじょうずにハーモニカを吹きながら歩いているのに出会ったりもした。お盆も今ほど盛大ではなかった。裸麦の実入りの遅れた年は、休まないで働く大人もあった。

9月1日はいよいよ2学期の始まる日だ。宿題をまとめて、通知表に認め印を押してもらって準備完了だ。夏休みの名残を惜しむために、私はトノサマバッタの飛び交う野良道を急いで川に行ってみた。水は冷たく澄んでいて、人影はなかった。〈2学期も頑張れよ〉と川が言っているように私は感じた。